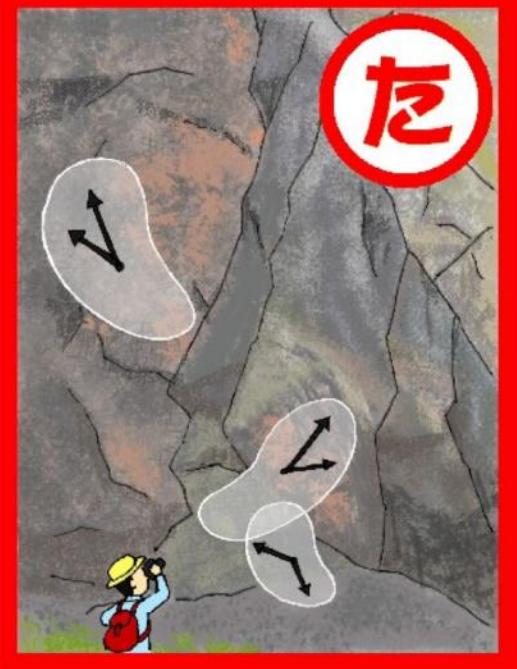


た



# ただの崖 でもそれ断層

中央構造線は西南日本を東西に走る大きな断層。多気町内の五桂や丹生の勢和・多氣JCT付近などでは断層が地表に現れている。

これは長野県諏訪湖付近から伊勢湾、志摩半島の一見辺りから紀伊川の谷、四国の吉野川の谷を経て、九州まで、一〇〇〇km近くにわたり東西に伸びる日本列島最大の断層、\*中央構造線です。

(\*このあとはMTLと略します)

この絵は五桂の万協製薬近くのMTL多気露頭ですが、他に同社の敷地の斜面や勢和多氣JCT近くの丹生露頭など多気町にはMTLが地表に現れている大変貴重な場所があります。地図では五桂池の東側の山々が直

線状に並ぶのが確認できます。構造線は両側で地質が大きく異なる断層で、MTLは北側がマグマが冷えて固まつた花崗岩や变成岩が中心の領家帯、南側が海の砂や泥などの堆積物が地下に潜つてきた變成岩が分布している三波川帯の岩石になっています。MTL沿いにも現在の地殻変動により多くの活断層が生じているといわれていますが、紀伊半島では高見峠より東の三重県側はあまり活発な活動をしていないということです。

最近は地震や噴火が多く、プレートや南海トラフなど地質学の用語をよく耳にします。何枚ものプレートが接していて、地殻の震国といわれる日本に住むわたしたちは地球の歴史を語つてゐる足元の大地にもつと目を向ける必要がありそうです。

# 中世の城郭の跡

## 篠山城　咲くささ

### ゆりは　町の花



南北朝時代（一三三六年）  
が伊勢の国司であつたため、  
南勢では戦闘が繰り広げられ  
ました。

五箇篠山城はこの頃、櫛田  
川の南岸にある標高一三七メートル  
の山頂に野呂氏により築かれ  
たものと言われています。た  
だし、そのころの城は私たち  
が思い浮かべる石垣をめぐら  
した城ではなく、戦のための  
砦のようなものでした。

戦国時代になると北畠氏が  
信長が攻め入ります。最初は  
戦火を交えましたが、信長は  
次男の茶筅丸（信雄）を北畠氏  
の養子にし和睦を結びました。  
しかし六年後、天正四年に義  
南北朝時代、南朝重臣の北畠  
氏が国司だった伊勢では戦乱が  
各地であった。五箇篠山城はこの  
頃築かれた。新多気町の花はさ  
さゆり。

父の北畠具教を殺害させ、北  
畠氏を滅亡させたのです。  
この時、京で僧になつてい  
た真教の弟具親は伊勢に戻り  
信長方の軍勢に挑みますが破  
れてしまします。本能寺の変  
を機に再び、五箇篠山城で挙  
兵しますが失敗。落城の際、  
具親の妻が夫の鎧兜を纏い馬  
を駆つて敵を引きつけ、櫛田  
川に身を投げる間に夫を逃が  
したという伝説があります。

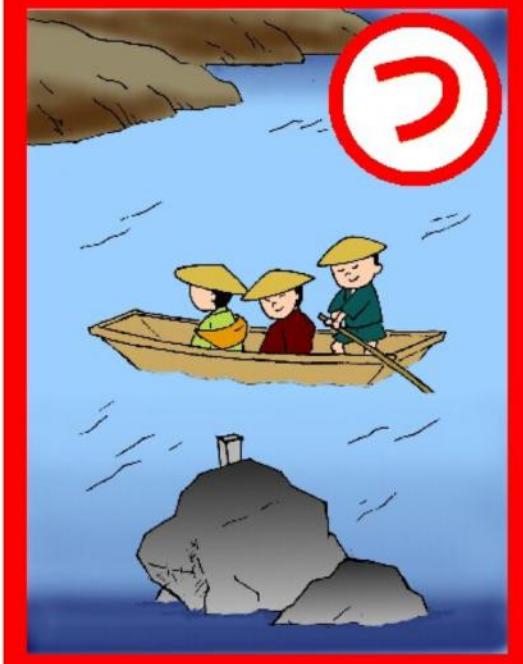
篠山城は掘割で区切られた  
腹には外敵の侵入を防ぐため  
の堀が掘られていています。木々  
の葉が落ちる季節に山を遠く  
から眺めると人工的に削られ  
た山容が確認できます。

町史跡に指定されています。

五箇篠山城はこの頃、櫛田  
川の南岸にある標高一三七メートル  
の山頂に野呂氏により築かれ  
たものと言われています。た  
だし、そのころの城は私たち  
が思い浮かべる石垣をめぐら  
した城ではなく、戦のための  
砦のようなものでした。

戦国時代になると北畠氏が  
信長が攻め入ります。最初は  
戦火を交えましたが、信長は  
次男の茶筅丸（信雄）を北畠氏  
の養子にし和睦を結びました。  
しかし六年後、天正四年に義

つ



## 津留橋の 下に見えてる はかり岩

伊勢本街道櫛田川の津留の渡したはかり岩を越えると川止めになり、参宮帰るの人々は宿に泊まつて水が減るのを待った。宿場町津留はいつも賑わっていた。

伊勢本街道は奈良の方から伊勢神宮へお参りする人が利用する道でした。美杉村（現・津市）から飯南町の櫃坂を越え櫛田川の岸辺まで降りると、あとは茅原まで川沿いに進みます。ここで対岸の津留に渡ります。昔はどの川にでも橋があつたわけではなく、取り外しのできる橋板の簡単な木橋や石を並べて飛び石伝いに渡ることもありました。櫛田川に両郡橋が架けられたのは明治21年になつてからでした。浅い川は徒歩で渡つたり、津留のように渡しのある川

茅原へ着いた旅人は舟に乗り津留へと渡ります。津留は櫛田川が鶴の頭のようになります。蛇行していることからついた名前とも言われています。两岸に鉄線を張り渡しそれを手繰りながら舟を進めることができます。対岸はすぐ目の前ですが水量が川中のはかり岩を越えると川止めになります。舟を出すこともできなくなります。两岸で旅人は宿に泊まり水が引くのを待たねばなりませんでした。津留には多くの宿屋がありましたが、当時の屋号で呼ぶ家が今もあるそうです。

片野の八柱神社で行われる長龍神事は五穀豊穰（米や麦など）を祈る長龍神事が行われます。四百年以上続く長龍神事には伊勢神宮にまつられている天照大神の弟、素戔鳴尊が登場します。天の岩戸のお話では素戔鳴の乱暴に怒ったことが原因でした。

このできごとの後、素戔鳴尊は神々の住む高天原から出雲（今後の島根県）に追放されます。そこで八岐大蛇を退治し奇稻田姫を助けました。長い長い獅子舞といつた感じです。天狗の赤い面をかぶつて話を表現している。

# 天狗さん

## 長龍神事の主役だよ



いるのは素戔鳴。黒い面は彼の助つ人です。  
伊勢・熊野・氏神に拝礼して始まります。不思議なお酒、キトリ酒を飲むと天狗は強くなり、長龍は弱っていきます。クシナダヒメは竹を編んで作った櫛に化粧しています。鉄棒を持ち天狗はヒメや大蛇に食べられた子どもを助けようと戦う長龍狂乱です。天狗が勝ち、長龍がくわえた櫛を落としヒメは助かりました。長い胴の中の子どもたちを引っ張り出す「尾とり」。長龍が逃がすまいとする様子を表し子供たちもなかなか出ようとせず、笑いに包まれ終わります。片野長龍神事保存会の人た



# 時をこえ くまの 熊野へ続く めきとうげ 女鬼峠

伊勢参宮が盛んになつた江戸時代。参宮の後、熊野に詣でるため熊野街道を行く人が多くなつた。女鬼峠は成川・相鹿瀬間。最頂部にはお堂があり道中の安全を祈つた。

江戸時代。参宮の後、熊野に詣でるため熊野街道を行く人が多くなりました。しかしそれよりも昔、「蟻の熊野詣」という言葉ができるほど熊野参詣が流行したことがありました。それは平安時代末から鎌倉時代にかけて、最初は皇族や貴族たち、さらには武士、庶民へと熊野信仰が広がり、列を作つて歩くようになり、人が熊野三山を目指したのです。この時の道は都から紀伊半島の内部を通り熊野へ南下する道でした。

伊勢参宮から転じて熊野をを目指す「熊野古道伊勢路」

は紀伊半島の東側を南下します。田丸で伊勢本街道を離れ外城田地区の野中を通り、「左\*さいこく道」という追分の道標があります。